

「すみれ」 高貴な紫連想

文人の
武蔵野

村上春樹の長編小説「スプリングの恋人」で直接的に「武蔵野」と指示されているのは「すみれ」の住む吉祥寺であり、「すみれ」が「ぼく」と訪れた井の頭公園でした。「武蔵野」と呼んでいるのは「ぼく」だけで、「すみれ」自身は特に「武蔵野」を意識していません。「ぼく」は登場人物で

村上春樹 ⑭

あると同時に一人称の語り手です。「すみれ」に想いを寄せる「ぼく」としてはかけがえない存在である「すみれ」を「武蔵野」という地名と結びつけて認識したかったということになります。綽名ばかりのこの作品で、「すみれ」は唯一固有名を与えられた登場人物です。武蔵野の色とされる紫色を連想させる「すみれ」という名前は、何らかの意味がありそうです。

すみれと言えは、21世紀の



井の頭公園のベンチ。「スプリングの恋人」ではすみれとぼくが並んで座り、会話を交わす（三鷹市で）

流行歌に由来する「純恋と漢字を当てて受けとめるのが作品のテーマとも重なり、通じもよさそうです。ですがここ

では、高貴な色とされ重宝されてきた古代紫との関連を指摘しておきたいと思います。

俗説も多い「すみれ」と「むらさき」ですが、どちらも「万葉集」に登場します。万葉集から植物がみられる植物だと考えられます。「万葉集」ですみれは「須美礼」として4首に歌われ漢名はありません。むらさきは和名の「紫（草）」として15首、「武良前」「牟良佐伎」として2首に歌われています。すみれの花の色は紫とされますが、色名としての紫の起源は植物としての紫草の根（紫根）です。△武蔵野Vの範囲は定められません。△武蔵野Vの色

は紫だと言えます。それは、紫草を天皇に「供進」していた諸国一覽を記した「延喜式」からわかります。常陸、相模、武蔵、信濃などの国名が並び、「東国」（都のある西方から見たときの東方にある関東広域）すなわち広義の武蔵野エリアが主たる産地であったことが読み取れるからです。

（武蔵野大教授、むさし野文学館館長・土屋忍）

過去の連載は、読売新聞オンラインで読みいただけます。スマートフォンはQRコードから。



スマートフォンはQRコードから。